

教育課程部会書面審議に際しての意見

千葉大学 貞広 齋子

石井氏の提案、熊本市の提案について、基本的に賛同致します。

その上で、それぞれのご提案も参照しながら、以下、意見を述べさせていただきます。

○履修主義がもたらした日本型教育システムの強みと今後

学習指導要領の存在と義務標準法は、日本型教育システムの象徴です。これらは、履修主義・年齢主義と連動しており、全ての子どもに、同時期に「同じ」教育を行うことで、全体の底上げに貢献して来た歴史があると考えます。

加えて、教育義務が「就学義務」として果たされることで、対面で集団的に学ぶことが重要視され、「話し合い活動」や集団的思考（学び合い、響き合い、練り上げ）といった集団的学びの展開の中で、子どもの学びを保障する日本の学校教育の強みももたらしたと考えています。活用の仕方にもよりますが、この強みは、「インクルーシブで真正な学び」にも今後活かされると考えます。

○転換は必要であるが、履修主義か修得主義かの択一ではない

しかし、多くの人々が共有する様に、上記の様な教育の在り方には、転換も必要にもなっています。但し、そこで必要とされるのは、履修主義か、修得主義かというゼロサムの議論ではありません。むしろそれらの境界をどのように融合させ、新しい教育の在り方を考えるかことが重要であると考えます。

佐藤(2001)は、「義務教育(compulsory education)」や「国民教育(national education)」と「公教育(public education)」とを峻別し、前者が国民の育成を目的とした共通性を前提とする共通教養であるのに対して、後者のカリキュラムは市民の育成を前提とし、多様な文化が交流する公共文化で組織されると述べています。

従来、我が国の公教育は、基本的に前者の共通性を基本とすると同時に、履修主義に依拠して行われており、認められる内容のバリエーションの幅も、学びの集団の多様性も相対的に狭かったといえます。財政配分についても、義務標準法にあるように、基本的に同一ルールで配分されており、学校や地域、家庭の課題性に配慮した配分は例外的です。しかしながら、今後は、共通性に基づいた国民教育的な公共のあり方から、「一定の多様性を含み込む公共」への転換をもたらす契機となる可能性があるといえます。そうしたトレンドからは、履修主義のみへの依拠から、一部の教育活動や、特定のニーズを持った個人について、履修主義と修得主義のハイブリットを基本とした、新たな形への転換が迫られていることを読み取ることができます。その際、教育内容、教育方法、教育主体等の多様化を伴うことが想定されますが、ここで最も重要になるのは、後に述べる質保証の問題であると考えます。

○個別化は規準化を回避できるか

石井氏も指摘する通り、転換後の学校教育で希求されるのは、個別化ではなく、個性化であると考えます。個別に最適化された学びが、仮に、量的学びとして展開され、テストスコアに象徴される様な一元的な尺度に基づいて評価される場合、教育がパッケージ化され、画一的になり、パターン化や過剰な規準化・範型化がおきる (Sahlberg 2011; Steiner-Khamsi 2003) 可能性があります。特に、学校での活用が必要以上に拡大された場合は、学校現場もそれに気がつかず、無自覚なまま、教育活動を工夫する職能やイノベーション力を失っていくのではないかという危惧を持ちます。これらを回避することに、十分に自覚的である必要があると考えます。

○質保証の問題

最後に、質保証の問題を取り上げます。

履修主義の制度では、一定程度の質は維持されるものの、個性化への対応や、教育革新は生まれにくい側面もあります。このとき、公財政支援の面からも、学校や地域、家庭の課題性に配慮した配分は行われ難くなります。

一方、修得主義を基本とするシステムの場合も、質保証が一元的尺度のみによって行われると、高評価を受ける教育成果(主としてテストスコア)を目指して平準化が進行するため、個性化の幅は縮小していきます。教育成果や学力問題は、教育の方法や技術の問題に矮小化され、特に数値化されたグローバルスタンダードが介在することで、教育の多様性が危機にさらされる可能性もあります (Meyer & Benavot, 2013:12)。このとき、評価の結果による信賞必罰的な財政配分制度が伴う場合は、教育の質の格差を生むことに繋がりがかねません。

従って、当該学校の教師等が多面的な評価基準の設定に関わりながら、新しい質保証のシステムを設計していく必要があります。これらが担保されてこそ、個性化を前提とした履修主義と修得主義のハイブリットシステムが実質化されると考えます。

<引用文献>

Meyer, H.D.,&A.Benavot, (2013). PISA and the Globalization of Education Governance: some puzzles and problems. PISA, Power, and Policy : the Emergence of Global Educational Governance, Symposium Books Oxford Studies in Comparative Education,9-26.

Sahlberg, P. (2011) Finnish lessons: What can the world learn from educational change in Finland? Teachers College Press

佐藤学 (2001) 「学校の公共性と市場原理の政治学」『教育哲学研究』83号、28-32頁

Steiner-Khamsi, G. (2003) The politics of league table. Journal of Social Science Education, 1